

あ と が き

本年度は富岡製糸場が官営模範工場として創業されてから140年目、富岡町の新田開発が着工されてから400年目にあたり、さらに「富岡製糸場と絹産業遺産群」の推薦書がユネスコの世界遺産委員会に提出された記念すべき年度でもある。

世界遺産の最も大切な要件は当該遺産が真正性を保ち、かつ普遍的価値を有しているか否かが問われる訳であるが、富岡製糸場は操業開始して以来、経営主体者の交代はあったものの創業当初の建造物群を全面活用しながら115年間に亘って生糸生産一途に生産活動を続けて来た。これらについては先学の多くの研究はあるものの115年間の事業実績がすべて解明されたとは言い難く、これらを追究することがさらなる普遍的価値の検証に役立つものといえよう。

当センターの本年度の目標の一つとして、これら未解明部分を明らかにするべく一人一テーマのもとに研究論文の作成を目指した。その成果品が本報告書である。

岡野論文は前年度の「旧富岡製糸場の設立当初の労働環境に関する研究」のいわば継続・発展研究というべきもので、経営主体者の変遷の中で女子労働者の教育や教養習得機会が如何に存在したかを追究したものであり、従来にはない研究視点である。

今井論文は富岡製糸場の最後の経営を担った片倉工業が本来的には輸出産業の一翼であった生糸生産を戦後次第に増大してきた安価で大量の生糸製品の輸入の中で如何なる経営活動をなし得たかを追究したものである。

結城論文は、昨年まで当センター担当係長であり、本年度に課内の推進担当係長に転出した結城が、ポール・ブリュナが上海の旗昌糸廠(後の宝昌糸廠)の経営に携わっていた時期にリヨンの商業会議所の依頼によってトンキンに赴き、養蚕製糸の実態を調査研究した報告書を明らかにしたものである。フランス語の原文を結城自らが翻訳した労作である。

さて、昨年度、製糸場の南面法面(鑄川南崖面)が一部崩落し、その実態調査をした際に煉瓦遺構が検出された。それが大正期に鑄川から揚水した施設と考えられるところから、腰塚論文はこれらの関連性に着目したものである。煉瓦遺構の本格的な発掘調査は実施されていない段階ではあるが、製糸には大量の水を要することから鑄川からの揚水に関しては今後十分な調査研究が望まれる。腰塚論文はこの先駆けをなすものであろう。

当センターの役割は単に報告書の作成のみに限られるものではないが、本報告書が特に片倉工業から委託を受けた膨大な諸資料の整理・保存対策を図りながら、まだ手を付けていない分野の解明を図ることが普遍的価値の検証に役立つと同時に、これらに興味関心を寄せられる研究者の資料の一助になればと願うところである。

平成25年3月

富岡製糸場総合研究センター

所長 今井 幹夫